

資料紹介と考察 沢田信太郎日記（『無心録』）と藤田武治日記（『詩文日記』）

塩浦 彰

啄木の在北海道時代に関わる二つの日記資料がある。

まず沢田信太郎の日記（表題『無心録』）については、おうふう版『石川啄木事典』『一般項目』中の「沢田信太郎」の項に紹介されている。また、日記所蔵先は函館市立図書館「啄木文庫」で、この日記の所在は広く知られている。

いっぽう、藤田武治日記（表題『詩文日記』）については、みやま書房版『啄木と小樽・札幌』小樽啄木会編に、日記の一部が写真版を添えて紹介されている。また前記おうふう版『石川啄木事典』『項目編 藤田武治』の項では、記述資料の一つとしては用いられている。だが、この資料価値の多大な藤田日記を用いた本格的な研究は、いまだ管見に入らない。

沢田日記・藤田日記それぞれに追尋すべき問題は多々あるはずで今後の研究者の出現を待ちたい。本稿では各日記の一部を取り上げて、啄木側の資料と照合しつつ、そこに浮上する問題を論じる。

(1) 沢田信太郎日記

『無心録』と題し、当時沢田ら函館の文学仲間たちが出していた『紅苜蓿』の原稿用紙を用いて記入されている。

沢田信太郎は一八八二年（明治十五年）北海道松前郡に生まれ

て、一九五四年（昭和二十九年）に没した。

『石川啄木日記』明治四十一年一月四日の項に、「夕方本田荊南君に誘はれて寿亭に開かれた社会主義演説会に行つた（中略）今は社会主義を研究すべき時代は既に過ぎて、其を実現すべき手段方法を研究すべき時代になつて居る」と記してある。

じつはこの「社会主義演説会」は後述する藤田の友人高田紅果も出席し、会の内容や会後の「有志茶話会」で多々質問する啄木について、後年の手記に「私達の崇拜の対象である詩人」の「社会思想に対する素養は、文学詩歌に於けるとは異なりまだ駆け出しの域を出ぬものに見えた」と書いている。

「二月五日 沢田君が来た（略）日報社の事やら社会主義の話」

一方で、この日の沢田日記。「櫻庭兄妹を訪ふ。意外にも保君は社会主義者たること」とあり、啄木自身の関心については、この思想関連ではまったくふれていないが、啄木周辺に櫻庭保という社会主義者の存在していた点に、留意したい。

さらにこの近辺の沢田日記をみると、啄木日記にはあえて記されない啄木の動静と心情が判明する。

一月六日、啄木が訪問「薄暮まで一本の銚子に談る 酒量の小さな

ること例の如く然り」翌日の啄木日記「例の如く東京病が起つた」

一月九日「帰宅すれば、図らず啄木露堂の両兄来る（中略）啄木君の個人解放主義と露堂君の社会制自我主義をば火花を散らして最もよく戦ふ」啄木日記では記されない両者の対立が具体化される。

一月十日 沢田と櫻庭ちか子との縁結びに奔走する啄木の様子を記す。この事情は啄木日記にも小説風な語りで記されている。

櫻庭ちか子は、小学校訓導で書道絵画にも堪能な才女であった。また、沢田ともすでに知友の關係だったので、啄木の弁舌と行動力によって話は急速に進む次第が、沢田日記には記録されている。

一月十二日「交渉の全権はすべて石川君の負ふ所となり愈々以て本格の仲媒役となる。」この啄木の媒酌人ぶりは、同日の啄木日記に啄木の弁舌もそのまま「録音再生」のごとく記録された。

だが、この縁談は櫻庭ちか子の母親を差し置き、本人同士の意向を第一にして進められたために蹉跌してしまつた。いかにも明治という時代の（悲劇）らしい。

十四日は櫻庭と沢田自身の縁結びのため五日にも及ぶ「奔走の勞」をとつた啄木について、「熱誠、真直、氏の性格にあらざれば能はず天下の奇男子と云ふべし」と称賛する。啄木日記は一月十五日にも十二日同様「実況録音」風に登場人物の言動が記される。

一方、啄木は先年以來の小樽日報社内紛に関わり、年末に自主退社してしまう。その鬱憤が沢田の結婚に関する過度なほどの肩入れに転じたのかもしれない。

そして、無職の啄木を案ずる沢田の斡旋で、小樽日報社白石社長への助力を得て『釧路新聞』入社が決定する。

一月十九日午前十一時、降りしきる雪の中、啄木は子を背負つた妻に見送られ、小樽駅頭を去つた。

参考『無心録』より（漢字・仮名遣いなど原文のまま）

明治四十一年 戊申

一月一日

流石の寝坊も元日なれば常例を破ぶりて六時半と云ふに起床す、弟も昨夜より來泊せるも、節だけは家にてやるが順当なればとて、矢張り母と二人の元日を迎ひて祝宴をあぐ、床の間に飾りたてたる神佛の合祀壇には、四年前の祖父父母の嚴乎として在すに似ておのづから涙流る

伯父よりの借着にて礼服だけは事欠かず、近所を一巡して山田町に伯父叔母を訪ひ年頭の祝詞を述ぶ。（以下略）

一月六日 寝てる裡から、校正の北洲を初め、鴻鐘、啄木数氏の訪問あり、聞けば、昨日社長宅にて社員一同の新年宴会を開き——余には使を出したる由——たるも欠席をは余と東原との二名なりし爲め、病氣でもあらずやとて尋ねくれたるなり、一度は全廃、一度は酒肴料と廟堂の風雲、幾度変せる新年宴会は斯の如くにして、突如に始められたるなり、而して小林依然たりと聞いては愈々頼みがたきは、社長のココロなるかな。

啄木氏と薄暮まで一本の銚子に談る、酒量の小なること定の如く然り。伯母さん折詰を持つて遊びに來る、一旦床に入りし母も起き、弟と余と四人にて卯酒をして飲む、十時半に伯母さん帰へる

（この記事に続き、勤務先の某社員への批判五行 省略）

知己とは、所謂金を貸す人の事なり、内所で苦しくとも、渋い面一つせずして、欣々然として融通をなしくる人は皆知己なり、前の所謂意気に感ずると同一の意味合にて、現在の世の中にもて嗤さる。弥勒の世とはかうしたものを云ふことよ

(2)・藤田武治日記

『詩文日記』と題し、B6版型ノートに、毛筆で記されている。

藤田武治(筆名・南洋)は一八九一(明治二十四年)北海道江差に生まれ、一九三八(昭和十三年)没した。

十五歳時、小樽に出て大きな農海産物商店の店員となる。その傍ら文学書に親しみ、生の苦しみに苦悩する日々を過ごす。その間に近隣に住む同じ年令の高田治作(筆名・紅果)と知り合い、藤村、泣菫、晚翠、紫舟らの詩集書などの貸し借りや、青少年の文芸雑誌への投稿を競う。この日記は、明治期にかかる文学青年たちの生態や、小樽に一時期住んだ啄木関係記事もあり、貴重な資料である。

藤田は高田とともに小樽居住時代の啄木を「先生」と呼称し、たびたび訪ね、日記にもその言動を記録している。そして釧路に転じた啄木は、すぐ二人へ小樽に残した家族の移転先を報せ、二葉亭四迷の作品名に洒落て「何卒行つて『其面影』をとつてくれ給へ」と家族の近況報告を求めた。以後も書簡をたびたび交換し、啄木最後の短歌と思われる作品は、藤田宛ての年賀状に記されている。

現在残る両者の交渉の記録として、初対面は明治四十年十一月二十二日、啄木から藤田あてに葉書が送られ、「御手紙拝見仕候お目にかゝり度候間一両日中に花園町畑十四、拙宅へ御来車被下度願

上候但し夜分」。さらに「拙宅は公園通高橋ビーヤホールの少し向ふの北一炭店でお聞きになれば解ります」と付記してある。

その後、啄木が釧路に転じた後、残された家族は、元料理屋の客間を借間とする一室に移った。高田は後年、文芸雑誌「秀才文壇」の「短篇小説」投稿欄に、一等当選した「間借」という作品の中で、この一室の模様を写實的に描いている。(後欄・参考2)

藤田が啄木に会見を申し込んだ契機は、『小樽日報』に掲載された啄木執筆と推測される記事、例えば十月三十一日掲載「超人と凡人」のニイチエ超人主義を基点とし、青年は社会の解放を目指して闘えという主張が、懊悩する藤田に響くものがあつたのであろう。

また、十二月二十二日の啄木日記に「夜、藤田武治来り切に人生を解するの途を誘ふ、大に個人主義を説く」とあるので、函館で沢田と論じたことが、さつそく応用されたのである。

藤田は初対面での啄木の印象を後年のエッセイ『在りし日の啄木』に「坊主頭の白面の一介の書生」「中央の詩人、畏敬すべき風格といふ予想に反する五分刈りの坊主頭」「旧知の後輩に対するやうな打融けた態度に惹きつけられ心安く話し合ふ」と記している。

その後の啄木日記での藤田と啄木の交渉記事は、翌四十一年一月一日「藤田武治は吉野花峯といふ男を連れて来た」とあり、年賀挨拶に訪れている。三日の日記記事に長文の新詩社批判があるので、啄木は、藤田らの地方文学青年に対し、同様の訓示を述べたと推察される。

その後、十九日まで小樽時代の啄木日記に藤田関係記事はない。後年の明治四十四年二月二十四日日記に「小樽の藤田君から不真面

目なやうな真面目な手紙が来た。淋病にかゝつて瘰癧を起したんださうである。さうして一度直つてから酒をのんでまた悪くなつたさうである。彼の歩いた路もまた不真面目なやうな真面目なものであつた」とあり、簡潔的的確な啄木の人間観察眼が示されている。藤田は前記小樽の商店に十年間ほど勤務後、東京横浜などの都市を彷徨後小樽に戻り病苦と貧苦の中、五十年に満たぬ生涯を閉じた。

参考一・『詩文日記』より（注・誤字、句読点など原文通り）

明治四十一年二月廿日 木曜日

啄木先生から手紙がくる。気焔當るべからず。函館の山口氏へ「少年世界」「実業少年」送る。

用事のでいでに家へよると鞍がへの談あり。

夜橋本さんの所へ英語を習ひにゆく。英語が済んでからも色々な論談に耽つたので十二時米屋の角迄吉田（橋本改）さんに送られ歸る

此夜橋本さんから「前世の約束」の真理にして 自然派の承認して居るといふ事を教つた。あ、雲霧時代から我等は其因を得て動いて居るのだ。

廿一日 金曜日 晚餐を百足屋からとつて酒をのんだ。

長さんの御馳走—— 新婚の祝だ。

廿二日 土曜日

高田君と吉田さんのすゝめで教会へゆく。

緒形といふ人の髯、態度、口調、は淺酌低唱的だ。其門形の髯がおかしいが殊に其論旨が淺酌で滑稽だ。

今一人の人の祈祷は壮士芝居的だ。なんだあのいつはりの泣き聲、嘔吐が出ようとした。

廿三日 日曜日

太陽の『弟の碑』（青果）の筆は瀟洒でいゝ。

廿四日 月曜日

ふと勤工場をぶらついて。不要な（でもないが）蔵書印を注文して了つた。

古本屋から借りて来た、春雨の『無花果』を十二時迄よんだ

廿五日 火曜日

小樽日報の一百号くる。僕の「獅子」てふ論ではない。十行文は三等とつて居た。『無花果』夕方迄かゝつて讀み了る。

春雨は才筆家なるかな。あゝ、えみやよ。えみや君は余が理想の

……

廿六日 水曜日

『無花果』を讀み了つて 自分はすっかり魅せられたつた。

永い永い餘韻が自分の小さき胸の小琴を猶ゆり返して、悲哀は胸に満ちてゐる。あ、此思ひ。それは実感の悪い芝居を見ての悲でもなく兄弟や親を失つた時 望を失つた時の悲でもない。自分が田舎芝居を哀れな旅役者を見た時の長い哀しみと。宗教の酔夢、幻影と覺つた時の悲哀とさも似てゐる。

自分は其光明的たると悲劇的たるを問はず。小説を讀み了へた時此の様な、悲哀の念がこみ上げてくるのだ。

あゝ、えみや、いかに汝が心の美しきよ。清きえみや。ウエナスのえみや。無邪気なえみや。麗しきえみや。愛のえみややさな

り。さなり。我は愛の化神として讀えまつらん哉。我にしてえみやの如き恋人得んか。

親も欲せず。子もいらす。君もいらす。金そは何するものぞ
我は々々 生をも望まんや。

三月二日 月曜日

午前十時頃、雑誌代を拂ふと思つて新文堂へ行く。

今月の秀才文壇が来て居る。しかし自分は餘り没書を喰はされるので癪にさはり、先月分から講讀をやめ、漸く修養に耽けようと思つて居た所なので。急いで手にとらうでもなく。用を済まして何気なく。繰りひらいた。とふと『明笛』てふ美文を三ヶ月程前 投書してあるのを思い出した。がもう没書を喰つたんだらう。しかし一通り顔ぶれだけでも見ておかうと。

べらべら繰つて行くと、美文欄の劈頭に明、笛、藤、田、武、治、などといふ字が閃いた、

其刹那、自分の胸がトクトクと動機をうち、顔は熱る。よく見ると正しく我輩なのだ。

あ、今日は何といふ幸の日であらう。

うれしい。うれしい：

血といふ血は盡く。うれしい思ひに燃えながら。全身を駆る。

本もつ手はかすかにわな、く。

あ、今夢を見てゐるんではなからうかと鋭く、反問してぢいと見る。

『四号と五号を貰つてゆくよ。三号もとつて呉れ給へ。そして今月から配達してくれ給へ。三号は必度だよ』

そういふ声はふるへを帯びてゐる。

夢中で本屋を飛び出して紅花君へ見せるにゆく。

紅花君は案外といふ顔で『ヤア』といふ

店へかへると大かつさい。

アラビアンナイト物語讀了す。比喩の巧妙なる。空想の美しく

豊かに、文章の巧みなる。譯文は馬琴調でいかにも上手だ

古今の大傑作―空想小説巨塊―

新妻君に閱して禮をいふ。奥の室で手紙をかいてゐる所であつ

た。色青く。三ヶ月の眉濃き。小柄の女である。

寝に就く迄うれしくつてうれしくつて。こんなうれしい事はな

い 多年の望が豫想外な時に於てとげられたのだもの……。幾度か

夢ではないかとばかり。

三日 火曜日

いちにち、昨日の事を廻顧しては微笑み、夢ではないかと不安

の念に襲われた。夜、啄木の妻君の家を訪ふ。紅花君と二人

四日 水曜日

朝 家へ行く。反物と秀文をもつて行つて見せる。

晝頃、町で一級下であった同窓の知人にあふと『小樽に出てあ

たのは君ではないか』といふ

『何か出て？』

『懸賞の賞をやるとある』

『あ、僕だ』（中略）

夜。鏡谷氏へはがき。(中略) 啄木先生へは画はがきを出す。

五日 木曜日 (省略)

六日 金曜日

秀文(注・文芸雑誌『秀才文壇』の省略)増刊『新緑』へ出すべく。夕方までかゝりて、『酒』てふ短篇を作りぬ。

夜、そをもちて、保険会社に紅花を訪ふ。二時までかゝりて、紅花は美文一篇、余も『夢日記』てふ美文を作りぬ。歸途郵便局へ投函す

此日、兎の叩きを喰ひて、肉食の厭ふべきを知りたり。

七日 土曜日 大半晴

余市の胡蝶より江刺の消息を報じ来る。

粟津は死せりと、あゝ、儂き哉や

八日 日曜日

名刺来る。頗る意に適へり。

九日 月曜日 大吹雪

十日 火曜日

十一日 水曜日 大暴風雪

吉野君 日報社から十行文の賞をとつて来て呉れた。

文鎮だ。夕方、保険会社へ行つてゐたら、大暴風雪になつて来て、十時頃歸るとスポーツスポーツとくるぶし迄、埋つて了ふ家鳴り振動 げに怖るるばかりである。

晝飯喰ふてから長さんと角力とつて五六度負け、笠井さんとつて一度(前後とも一度きりよりやらない)負かしてやつた。八犬傳の続きを讀む。

参考二・高田紅果作「間借」『秀才文壇』明治四十二年九月号

読者投書欄「短篇小説」の部 一等入選

啄木一家が小樽で居住していた「間借」は、偶然にも高田紅果が、一時期住んでいた旧居であつた。この作品はその旧居をモデルとしたもので、小樽での啄木の生活環境を具体的に垣間見得る。

それはまだ私の家が小樽へ移つた當時の事である。場末のある大きな古い家へ借間してゐた、丁度自分が十三かの春である。

新開地の此の町の有様は如何にも物珍しく自分等の眼にうつつた第一、借間などと云ふ事が聞くもの見るもの初めてであります事故北海道といふ處は面白い處だと思つた。

私の家は内地から移住して来たのでした。(中略)

何でもその家は、もと料理屋か何かであつたと見えて、そんな低い階級の人に貸すのは惜しい程、綺麗な普請であつた。一間一間に床の間があるし袋戸棚などがついて、天井板は皆杉柂の立派なものであつた。然し押入のある室はごく僅かしかなかつたので、大方の人は室の隅へ蒲団や行李を積んでゐた。

私の家でもそうやつて、其上から毛布を掛けて置いた、そんな風故何となく座敷がいつもゴタゴタしてゐるやうな氣がしたけれど、旅の事故誰れも別にそんな事を云ひもしなかつた。

私はそれから七日ばかりして學校へ行く事になつた、後で聞いたのだけれど、其家には十數件の家が同棲してたのだ、それ故朝から晩まで二階を上る音、あつちこちから障子をびつしやりびつしやり開け閉する音が中々喧しかった。(後略)